

## 年間第 22 主日 マタイ 16：21～27

旧約で育ったペトロは、メシア＝王とは、世界に君臨してすべてを治める王のイメージしかありません。ですから、受難予告に「そんなことがあってはなりません」と、反論してしまいます。するとイエス様に「サタン（誘惑する悪い者）、引き下がれ」ときつく言われてしまいます。今日は、この場面、「悪」について考えます。

福音書の中で、イエス様はたくさんの「身体的な悪」から解放していました。「イエスから力が出て、すべての者をいやしていた」（ルカ 6：19） 「このようになって欲しい」とわたしたちも「悪」からの解放を願います。けれども、イエス様はもっと底の深い「道徳的な悪」に対しては別の方法を取っていました。イエス様自身が「悪」を背負う苦痛に満ちた方法でした。鞭打たれて押しつぶされるのを受け入れました。イエス様が、ご自身を十字架上で捧げ、そこでのゆるしを通して「悪」に打ち勝ちました。主の祈りで「わたしたちを悪からお救いください」と願いますが、この願いはイエス様が捧げてくださった大きな犠牲を伴っています。イエス様の限りない愛によって人間の「悪」が沈められるのです。「わたしたちを悪からお救いください」という祈りは、イエス様の死と復活に訴えるものです。

わたしたちはこの世で「悪の衝撃」を感じなくていいように計らわれているわけではありません。苦痛を味わっても、イエス様の十字架と復活によって信仰と希望を確信するように導かれています。もっとも深刻な「悪」は、試みのさなかで負けること、信仰と希望を失うこと、自分に絶望することです。わたしたちが「悪」からの救いを求めるのはこの「絶望」に打ち勝つためです。おん父が、十字架にかかったイエス様を敵から守ったように、わたしたちをも守られます。希望のうちに勝利するように導かれます。この希望をもって「わたしたちを悪からお救いください」とおん父に願うのです。イエス様は、ペトロも「誘惑」「悪」から免れないことを知っていました。だから「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」（ルカ 22：32） このイエス様の祈りで、ペトロは裏切った後、立ち直る力を得ました。

夏休みに読んでいた『聖ヴィアンネの精神』（モンナン神父・著 久保守訳 聖母文庫）には十字架についてこのように書かれていました。（一部、表現を変えています）

「この世は川の上にかかった橋です。それは私たちの足もとを支えるだけです。・・・私たちは、この世に生きていますが、この世の者ではありません。毎日『天におられるわたしたちの・・・』と唱えるのですから。ですから報いは、私たちが故郷に帰るとき、つまり父の家に帰る時まで待たねばなりません。そのためにこそ、善良な信者は十字架を忍び、反対や不幸や軽蔑や中傷を耐えるのです。事実、そうであれば結構なのですが・・・しかし、たいていの人が、このことをいぶかるのです。神様を愛していれば、反対にあったり、苦しんでいたりするはずはないように思われるのです。・・・『あの人は頭が良くないが、何をしても成功する。それなのに、私は私のできることをしてもダメだ。万事がうまくいかない』と私たちは言います。これは、私たちが十字架の価値と

幸福とを知らないからです。

「悪からお救いください」 受難・十字架を拒むのではなく、受け入れる信仰を願いましょう。